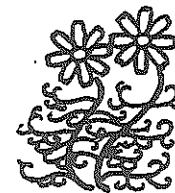


勝林寺おもて額

如来さま

如來の作願をたづねれば
苦惱の有情をしてずして
廻向を首(しら)としたまひて
大悲心をば成就(じょうご)せり

正像末和讀



わたくしがこの親鸞さまのうたつたご和讀に
出会つたのは小学校一年生のころです。かろうじてお正
父が死んでそのあと、時どき祖母に付き添
われてご門徒のお葬式やその後の法事にお参
りさせられていたころです。かろうじてお正
信偈が唱えられるだけで、ご法話などできる
わけがありません。たいていの場合はその村
の「長」(おき)、今でいう代議員のおじいさん
が代わりになにかお話をしてくれました。

あれから八〇年経過しています。
そのおうちだけでなく、その「村」も最近
の過疎現象で今は全部消えてしまっています。
そのおじいさんのお葬式で聞いた話。

「ここのおじいさんが、家の宝といつて大
切にしていたこの床にかかる色紙。こ
れは明治になる少し前に、ここのおじいさんが
本山講という京都のご本山に勤労奉仕作業
に出掛けたときのこと。そのときは、興正寺
さんとお西さん(栗澤寧)との境の土壙の建築
工事だったそうだが、なか五日間とまりの作
業で、夜は総会所(そあいじょ)というところに通つ
て偉い和上さんのお説教を聞いたが、難しく
てなんにも分からん。最後の夜、意を決して
尋ねた。そのときに和上さんから書いてもらつ
たのがこの色紙。

この家のじいさん死ぬるその日まで、大き
な声あげてこの色紙のご和讀を唱え念佛申し
ていた。「書いて下さった人の名前も忘れて
しまったが、これが如来さまじゃと思うてま
す」

じいさんはいつもそういうて喜んでいた。
昔はどこかの村にもそんな方が一人や二人い
なさった。

「如來」(じらい)

「如來」とは一般に、如ヨリ来生ス、と解か
れています。仏教には、阿弥陀如來。大日如
來・藥師如來などたくさんある如來様が礼拝の
対象にされていますが、もともとインドの仏
教古典語サンスクリットではタツタアガタ。
「如より來生した」。眞実真如より來生する
ものとするのが一般的です。

眞実とか眞如とは何か。わたしたち凡夫に
は到底分かりません。分かりませんがキット
世界宇宙を根本から動かしているそんなもの
があるはずです。例えばこの宇宙を成り立た
せている真理は必ずあるはずです。今の私に
は分からぬだけです。だから科學者なども
それを求めて研究に励むのです。

如來。私には見えないけれども常に私を願
い働いているそんな働き。「如來ノ作願」。
「如來の願いとその働き」。それはなんのた
めの働きかを尋ねて見ると。「廻向」。廻
向というのは、廻自向他といつて、自分の積
んだ善根功德を、自分一人のものにしないで
他のために振り向けることとされています。

如來さまはこのことを「首」。いのちとさ
れるそういう方と云うのです。

「大悲心」。「大慈悲のこころ」。

慈悲とは古来、マイトリー・カルナー。
「拔苦、与樂」。友として呻く。苦しむもの
に寄り添い、いっしょに呻き泣く。これが慈
悲です。その願いをこめて「南無阿弥陀仏」
というお念佛を仕上げそれでいまもこの私
に呼びかけて下さっているのです。それを
「本願成就の念佛」と云うのです。

ですから、親鸞さまの教え淨土真宗の教えは
本願他力廻向の教えと云います。

このご和讀は、インドに出た第二のお釈迦
さまと讀えられた天親菩薩(または世親菩薩)
と云う方が著した『淨土論』に出ているおし
えを、親鸞さまが感激して日本語で歌つたも
のだそうです。

むかし、昭和七年に父「哲雄」が死に、
昭和十年の春、母「やゑの」も死ぬるその間
に、私の弟も急死しました。ご門徒へのお参
り、寺の庫裡の建築の大事業の進む日夜に、
わたしひとりに毎朝「お正信偈」とご和讀を

中心にした「お説教」を仕込んでくれた奇酷
な生活の母を、最近このご和讀と一緒に思い
出すことがあります。「たとえ私が先に死ん
でも、如來さまのお呼び声(南無阿弥陀仏)
のなかでおまえを願っているからね」といつ
たことばを想い、お念佛を申すのです。

十月 勝林寺 予定

四日(木) 御同朋実践委員会

六日(土) 長專寺 大遠忌法要

十三日(土) 兼井 亘宅 忌明法要

稻葉保夫宅 忌明法要

十四日(日) 初田 一三宅 忌明法要

十七日(水) 出石仏教会 P U S H 研修

一八日(木) 総代但馬ブロッサ研修会

一九日(金) 宮島幸彦宅 七回忌法要

二〇日(土) 西宗寺 報恩講

二二日(日) 澤田善男宅 一・三回忌

二六日(金) みのりを聞く会

二七日(土) 敬老報恩講

善立寺報恩講

二八日(日) 立脇 晃宅 二五回忌法要

(敬称略)

八月三十日

葬儀

唐川 初田寿太郎様 八十九歳

九月 七日

出合 稲葉 きよ様 九〇歳

一大事たるべし

我がみのうえばかり見て

踏み違うぞかし

行き先 向こうばかり
見て

足元を見ねば

人のうえばかり見て

まずば



